



Title	永井荷風による館柳湾評価の背景：明治期漢詩人の江戸漢詩に対するまなざし
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	語文. 2014, 103, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70940
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

永井荷風による館柳湾評価の背景

—明治期漢詩人の江戸漢詩に対するまなざし—

合 山 林 太 郎

はじめに

館柳湾（宝暦二年〈一七六二〉～天保一五年〈一八四四〉）は越後の人、江戸に出て亀田鵬斎に学んだ後、林述斎に従い、役人として飛驒高山などに赴任した。詩集としては、『柳湾漁唱』初集（文政四年〈一八二一〉序）、二集（天保二年〈一八三二〉序）、三集（天保二年〈一八四二〉序）を著し、また、中晩唐を中心には数の中国詩の詞華集を刊行した。このほか、詩文や逸事を漢籍から集めた歳時記『林園月令』を編んだことでも知られている。^①

本稿が試みるのは、この柳湾の詩についての理解、とくに数百にのぼる彼の詩のなかで、どの作が高い評価を得たかについて、近世後期から大正期までの間の通時的な変遷を分析することにある。幾多の漢詩人のなかで殊更に柳湾を取り上げるのは、彼の詩をめぐる議論には、近世後期以降の漢詩についての認識の変遷を

知る上できわめて示唆に富んでいるからである。

柳湾をめぐる議論は、これまで近代の作家永井荷風とともに語られることが多かつた。荷風は、その著『改訂 下谷叢話』（昭和一四年〈一九三九〉）「第十三」において、「柳湾は江戸詩人の中わたくしの最も愛誦するものである。」（『荷風全集』〈以下、『全集』〉と言う）第一五巻・〈一八二二頁〉と述べたが、柳湾の詩に対する自身の感想を、『葦齋漫筆』（大正一四年〈一九二五〉二〇〇月、『全集』第一五巻、執筆は一部大正一三年）において記している。ここで、荷風は、自身の生活体験や父禾原に関する思い出について触しながら、「秋尽」や「初冬即時」、「雜司谷雜題」などの柳湾の詩に対する自らの愛着を語っている。

ただ、このような荷風による評価は、近世期以降の様々な柳湾の詩に対する見方の一つに過ぎず、実際に荷風の見解は、それ以前の時期の柳湾理解と様々なかたちでつながっている。また、荷風研究に即して考えるならば、荷風の柳湾評価の意義と特徴は、

それ以前の柳湾理解との比較によつてはじめて明らかにできると言ひ得るだろ。本稿では、近世漢詩史を視野に入れつつ、荷風の柳湾詩評価の意義についても分析してゆく。

一 江戸後期から明治期初期にかけての柳湾評

柳湾についての後世の評価を検討する前に、柳湾在世時に、彼がどのように評価され、また、どういった詩が注目されたのかについて考えてゆく。

柳湾が詩人としての名声を得る原因となつたのは、菊池五山『五山堂詩話』への詩の掲載である。具体的には、同書の卷三（文化六年（一八〇九））、卷六（文化九年（一八一二））補編の卷三（文政九年（一八二六）^②）において、柳湾の詩が評されている。五山はこれらの文章のなかで、「二人同宗中晚、而小異其趣二人（筆者注 柳湾と卷菱湖のこと）は同に中晚（筆者注 中晚唐のこと）を宗とするも、其の趣を小異す」や「柳湾仕為小吏、半生為風塵所累。然吟詠不絶。和雅醞藉、似其人（柳湾、仕へて小吏と為り、半生、風塵の累する所と為る。然れども吟詠絶えず。和雅醞藉、其の人に似たり）」などと述べ、柳湾の温和で清廉な人柄や中晚唐詩に対する愛着などを説いている。

こうした柳湾像は、『柳湾漁唱』や和刻本の詩集の序跋における記述などによって増幅されてゆく。たとえば、『柳湾漁唱三集』の朝川善庵の序には「君之於詩、刻意学唐、字句欲其必全雅、平仄欲其必全協。百鍊千磨、漸老漸熟。久之、融洽入変、宛然唐音

矣（君の詩に於けるや、刻意、唐を学び、字句は其の必ず全て雅ならんことを欲し、平仄は其の必ず全て協はんことを欲す。百鍊千磨、漸く老い漸く熟す。之を久しうして融洽し変に入り、宛然たる唐音となれり）」と記されている。この文章に見られるよう、唐詩を貴び、入念の字句を推敲するという柳湾のイメージが人々の間に浸透し、それはより後の時代の柳湾に関する記述にも影響を及ぼしたと考えられる。

一方、柳湾のどの詩を評価するかについては、明確な方向性が見られない。詞華集における収録状況から、その様相を探りたい。存命中、柳湾はいくつかの詞華集に作品を寄せている。全国規模の詞華集『采風集』（文化四年（一八〇七）刊）や、越後の詩家によつて編纂された『鷗盟集』（文化二年（一八一四）刊）、『北越古今詩選』（文政六年（一八二三）刊）、また、弟の卷菱湖の手による『篋中集』（文化一三年（一八一六）序）、発行した時期の元号を書題に冠した、いわゆる元号絶句集『文政十七家絶句』（文政二年（一八一八）刊）、『天保三十六家絶句』（天保九年（一八三八）刊）がそれに当たる。

これらの詞華集において、同じ詩が掲載されていることは必ずしも多くない。詞華集の編纂に際して、以前に収載された作との重複を避けるのは自然なことであるし、また、自らが投寄する場合、新作を発表しつづけることが期待されていたとも推測される。なお、菊池五山『五山堂詩話』において取り上げられた柳湾の詩は、人口に膾炙したものと考えられるが、そのなかでもとくに

「高山竹枝（第二首）」は、『五山堂詩話』（巻三）、『鷗盟集』、『文政十七家絶句』に掲載されており、最もよく知られた作の一つと考えられる。柳湾の好尚をうかがうために、ここに示す。

牙梳月様製来新

牙梳

月様にして 製し来りて新たなり

雲鬢当中出半輪

雲鬢

の當中に 半輪を出す

清光剛道東山好

清光

剛に道ふ 東山 好しと

何似月梳巧照人

何ぞ似ん

月梳の巧みに人を照らすに

（柳湾漁唱）

詩は、まず美しい女性の挿した象牙の櫛を、黒髪のなかに半月が出たかのようであると述べている。その上で、実際の月と櫛との比較に話題を転じている。すなわち、人は東の山に照る月ばかりを賞美するが、むしろ、夜間、美人の髪に宿る月の方がより美しく人を照らし出すのではないかと述べている。

なお、後述する明治初期の漢詩人森春濤は、この詩を踏まえ、「惆悵月梳今不見／如梳月尚挂東山（惆悵たり 月梳 今は見えず／梳の如き月 尚ほ東山に挂く）」（高山竹枝詞（第一首））

『春濤詩鈔』（巻八）という詩句を作っている。

柳湾の死後も、大槻磐溪『新選十二家絶句』（嘉永七年（一八五四）刊）、石川介齋編『皇朝分類名家絶句』（明治三年（一八七〇）刊）などに彼の作品が掲出されている。これらは、名の通つた専門の詩家の作品を集めた本格的な詞華集である。また、政治家などの作も収録する、明治期のより通俗的な詩集である『才子必誦』（巌山片玉）（明治八年（一八七五））や『今古百家詩文』

（明治二年（一八七八））『騒士必誦』（今古詩文）（同）などにもその詩が収録されている。

柳湾研究の第一人者である鈴木瑞枝は、『日本漢詩人選集第一三卷・館柳湾』（研文出版、一九九九年）解説において「この後

〔筆者注〕『天保三十六家絶句』のこと」に出る詞華集から、彼の詩があまり見当たらなくなってしまった」（二三四頁）と述べ、幕末期以降、人々の間から忘れられたと論じているが、必ずしも

そうとは言えないのではないか。

このうち『新選十二家絶句』中の詩は、収載された二〇首中、一三首が『文政十七家絶句』に、四首が『天保三十六家絶句』と重複しており、これらの先行する詞華集を参照しながら詩を採録したと推測される。このほか、『今古百家詩文』所収の三首の詩はすべて『皇朝分類名家絶句』に掲載されているなど、選ばれる詩の固定化が確認されるが、全体としては、なお柳湾の詩に対する評価に、定まつた方向性があつたとは言い難い。

二 坂口五峰『北越詩話』における柳湾評

柳湾評価の一つの画期となつたのが、大正八年（一九一九）の、越後の漢詩人坂口五峰（名・仁一郎、安政六年（一八五九）～大正二年（一九二三）、坂口安吾の父）による『北越詩話』の刊行であることは、衆目の一致することであろう。五峰は、越後蒲原の富農の家に生まれ、『新潟新聞』の社主をつとめ、郷里越後の文人の事跡を追い、それを『北越詩話』にまとめた。柳湾につ

いての記述は、その巻四にある。⁽⁶⁾

五峰は、「館氏系譜」などの多くの資料を涉獵しつつ、柳湾の詩人としてのありようについて論じているが、その中でとくに強調されているのが、柳湾の詩における濃密な情感の表現である。五峰の主張は、近世後期の文人賴山陽と幕末の儒者鷺津毅堂による柳湾への評価を踏まえており、その要点は「芬芳俳惻」という言葉によって示されている。以下、こうした理解がなされた背景も含め、五峰の考え方を追つてゆく。

山陽は、中国・日本の文人について批評した「論詩絶句二十七首」(『山陽遺稿』卷二)の第二四首において、「時好遷移如循環／百年唯鬧宋明間／誰從唐尾占閑地／西有竹田東柳湾」(時好の遷移すること循環するが如し／百年 唯だ鬧し 宋明の間／誰か唐尾により閑地を占む／西に竹田有り 東に柳湾)と詠い、柳湾について、田能村竹田とともに、晚唐の詩を推奨した人物であると述べた。

これに対し、毅堂は、「論詩絶句十二首」(『六名家詩鈔』卷五)の第一〇首において「芬芳俳惻好風情／妙手独彈雲和箏／一樣晚唐同雅好／君彝那得比枢卿」(芬芳俳惻 好風情／妙手 独り弾ず雲和の箏／一樣 晚唐 雅好を同じくするも／君彝 [筆者注] 竹田のこと)何ぞ枢卿〔同注 柳湾のこと〕に比するを得ん」と叙し、山陽の評価に対し反論を試みた。すなわち、竹田と柳湾とは、ともに晚唐詩を好んだが、柳湾がはるかに優れていると論じ、また、彼の詩について、「芬芳俳惻」であり、雲和の良質な木材

で作られた箏の音のようだと述べたのである。

五峰は「北越詩話」中において、山陽と毅堂の詩の両方を引用しつつ、毅堂を支持している。すなわち、毅堂の詩について「平允の見 [筆者注] 公平な見解」、始めて公論と為す」(四〇〇頁)と述べ、「而して芬芳俳惻の目に至りては 這老〔同注 柳湾のこと〕の擅場、他人の企及する能はざるもの」(同)と論じている。

そこで「芬芳俳惻」の語の意味が重要となるのであるが、毅堂らが念頭に置いているのは、袁枚の「人必先有芬芳俳惻之懷、而後有沈郁頓挫之作 (人には必ず先づ芬芳俳惻の懷有りて、而る後に沈郁頓挫の作有り)」(『隨園詩話』卷一四)などに見られる、強い感情、思いのたけといった意味である。ただ、ここで言う感情とは憤怒や劣情ではなく、詩で述べられるのにふさわしい、悲哀に富んだ美しい情調を指している。すなわち、毅堂は、柳湾を、哀愁を詠う詩人として評価していたのである。

次に見る「過旧送別處 (旧の送別の處を過ぐ)」は、「北越詩話」にも引用されており、五峰の言う柳湾詩の特徴が最もよく表れた作と考えられる。

曾賦銷魂傷別離 曾て銷魂を賦し 別離を傷む
美人今已隔天涯 美人 今 已に天涯を隔つ
憑誰与說江郎恨 誰に憑りてか 与に説かん 江郎の恨み
南浦重過春草時 南浦 重ねて過ぐ 春草の時

(柳湾漁唱)

この詩は、江淹「別賦」の「送君南浦／傷如之何（君を南浦に送る／傷めども之を如何せん）」や「楚辭」「招隱士」における「王孫遊兮不帰／春草生兮萋萋（王孫遊きて帰らず／春草生じて萋萋たり）」、同九歌「河伯」の「子交手兮東行／送美人兮南浦（子と手を交へて東行し／美人を南浦に送る）」といった表現を踏まえつつ、かつて友人と別れた地において、再び哀情を催すという内容である。すなわち、むかし友を送った南の岸辺には、別離を象徴する春の草が生い茂っており、ともに哀しみを語らうべきその人ははるか隔たつた土地にいると詠っている。

五峰は、柳湾の詩のあり方を、明治期の詩壇において支配的な地位にあつた森春濤一派のそれと系譜づけて考えてもいる。すなわち、「明治の初、森春濤、艶麗の詞を唱へて一時を風靡す。亦た柳湾之が先声を為せりと謂ふも可なり」（北越詩話）四〇一頁）と論じてゐる。

五峰は自身漢詩をよくし、春濤やその子槐南とも交流があつた。柳湾の唯美的な表現を、自らが親しんだ詩風の先駆をなすものと位置づけてゐるのである。

三 『作詩作文之友』「読詩偶評」における柳湾評

『北越詩話』は大正期以降の柳湾を論じる者にとって、一つの標準となつており、荷風もこの文献を参照している。ただ、この『北越詩話』の史的意味を考えるためには、もう一つそれより前に刊行された資料を顧みる必要がある。

これまであまり言及されたことのない資料であるが^⑨、明治三・二年に『作詩作文之友』（以下、『作詩』とも言う）という雑誌に連載された「読詩偶評」という記事がそれにあたる。この記事は、「虱仙」と「鼠聖」という戯号を名乗る二人による対話の形式をとつてゐる。その内容は、江戸時代の漢詩人の詩に対する批評である。具体的には、先に触れた『新選十二家絶句』に収録された、柳湾を含む一二名の近世漢詩人の作について論評している。

戯名を名乗る二人のうち、虱仙については、森春濤門下の詩人であり、明治三〇年代以降、東京漢詩壇の中心的な人物であった岩渕裳川（嘉永五年（一八五二）～昭和一八年（一九四三））と分かる。^⑩もう一人の「鼠聖」については特定が難しいが、明治期の東京漢詩壇の一人であると推測される。^⑪明治期にはなお、漢詩人は、社会的に名を知られていたが、「読詩偶評」は、そのような専門漢詩人たちの手によつて書かれたと考えられるのである。

この「読詩偶評」には辛辣な批評が多く、様々な詩人が論難されているのであるが、そのなかで柳湾は例外的に高く評価されている。たとえば、「柳湾の詩の余りに面白ければ、昨夜枕上にて柳湾漁唱三篇を見しが〔下略〕」（作詩）一一号、一七頁）や「柳湾は不幸にも後人の推重する山陽の如きものなきを以て、詩名は遠く茶山に及ばざるも、絶句一杯は實に茶山の上に在るなり」（作詩）一四号、一二頁）といった発言がなされている。

重要なのは、「読詩偶評」の柳湾評と『北越詩話』のそれとの

間に、類似点が多く見られることであろう。五峰が、柳湾の詩における哀情の表現に着目していることはすでに述べたが、「読詩偶評」においても、柳湾の詩に関して「何んともなき様なれど、其何ともなき中に、言ふべからざるの情韻のあるを妙とするなり」と述べている。¹²⁾

柳湾を春濤一派の詩の先駆をなすものと見ている点も、「北越詩話」と軌を一にする。柳湾の詩を称揚する際には、しばしば春濤の詩が引き合いに出され、また、虱仙には「柳湾は唯予等の最も好む所の調子を早くより為したる」（『作詩』一四号、一二二頁）といった発言もある。

このような主張の一一致をどのように考えるべきであろうか。すでに述べたとおり、岩渕裳川は春濤・槐南が率いていた詩派の主要構成員であり、五峰は彼らと親しく交っている。むしろ、「読詩偶評」のような認識が東京漢詩壇に共有され、それを受けて五峰が『北越詩話』の論述を行つたと推測すべきであろう。『北越詩話』の記述は、五峰というよりは、東京を中心とする明治漢詩世界の見解とみなすべきなのである。

ただ、「読詩偶評」には、『北越詩話』にはなかつた批評の傾向も見受けられる。詩の言葉や構造に対する強い関心がそれにあたる。たとえば、「過旧送別處」詩について、「此詩は一種の風神あり。真に是れ詩の三昧に入るもの」と称賛しているものの、起句の「傷」の字が「銷魂」の「銷」の字と意味の上で重なつてしまふことを、瑕瑣として指摘している。

こうした価値観を持つ東京の漢詩人たちが、柳湾の詩のなかでも最も優れた作と考えたのが、次に掲げる「読隋紀（隋紀を読む）」であった。「読詩偶評」では、この詩に全句圈点が振られており、虱仙は「此詩は先づ柳湾が詩中の第一と推さざるを得ざるべし」と述べている。

千里春風隄柳斜

千里の春風

隄柳

斜なり

龍舟供奉尽宮娃

龍舟の供奉は

尽く宮娃

君王独悔平陳日

君王 独り悔ゆ

陳を平ぐるの日

枉翦青溪一朶花

枉しく翦る 青溪

一朶の花

枉しく翦る

青溪

一朶の花

（柳湾漁唱）

詩は、その前半において、隋の煬帝が建設した大運河（隋堤）の様子を詠い、後半において、采華のただ中にある隋の煬帝の心中について推測を述べている。すなわち、柳たなびく運河には、宮女ばかりを載せた舟が行き来するが、煬帝は内心では、陳の宮女で絶世の美女であった張麗華を殺してしまったことを悔いているのではないか、と論じている。

『青溪』は、陳後主と張麗華が、晋王広、すなわち後の煬帝により斬殺された場所であり、『南史』張麗華列伝には、「及隋軍克台城、貴妃与後主俱入井。隋軍出之、晋王広命斬之于青溪中（隋軍の台城を克ると）及びて、貴妃と後主とは俱に井に入る。隋軍、之を出して。晋王広、命じて之を青溪中に斬らしむ」と記されている。なお、陳後主らが飛び込んだ井戸は、「臘脂井」という名で今日もよく知られている。

この詩について、鼠聖は、「ドヲデス上手なもんですな、青渓一朶の花（張麗華を云ふ）を柱剪せしを悔るとは、絶好議論なり」（『作詩』一一号、一五頁、括弧内は原文のまま）と奇抜な着想を美しい言葉で表現した点を評価している。鼠仙は、「承句の妙ありて、後の議論を出すなれば、此句を四句中の最も妙句とする」と論じ、この詩で最も優れた点は、歴史解釈を述べた転句ではなく、それらをスムーズに導く承句にあると述べている。『読詩偶評』における、言葉や構造への関心が看取される。

四 『作詩作文之友』における柳湾以外の江戸漢詩人に対する評価

『作詩作文之友』における柳湾評価の性質をより明らかにするため、柳湾以外の詩人についての評価も見てゆこう。

江戸・江湖詩社の中心人物菊池五山を例にとる。『読詩偶評』において最も高い評価を受けたのは柳湾であるが、逆に最も辛辣な批判を受けたのが、この五山である。とくに鼠聖は「予は五山の詩は大嫌なり」（『作詩』一〇号、一〇頁）と述べ、その詩について「一読すると惡息が紛々鼻を衝けり」「予は五山の詩を読むと、三斗の酸液を嘔出する如し」（同）と強く批判している。

五山の詩に対する批判の多くは、言葉の使い方に関するものである。一例を挙げるならば、五山に「四山堆雪玉玲瓈／月落荒村夜色空／炬火隔溪紅一線／已知獵手到寒熊（四山の堆雪 玉 玲瓈たり／月落ちて 荒村 夜色 空し／炬火 溪を隔て、 紅

一線／已に知る 獵手の寒熊に到るを）」（宿山村（山村に宿る））『今四家絶句』という詩がある。冬の山村に宿泊した際に、谷を隔てた彼方に熊を追う獵師の焚き火を見たというものであるが、この詩に対して、鼠聖は、「此詩は用語措語共に粗笨を免れず」と評を述べ、ほぼ一句ごとに問題点を指摘している。

たとえば、起句の「玉玲瓈」については、天子の庭園や宮廷などに対して使う雅びな語彙であり、荒涼とした山村の冬景色を形容する際に、この言葉を用いることは適当ではないと述べている。また、承句の「紅一線」についても、熟した表現ではなく、「紅一点」の方が自然であると論じている。

措辞や構造に執着する傾向は、議論に使われている詩学用語に注目すると、より明瞭に看取できる。『読詩偶評』では、詩語同士のイメージの連関が十分でない場合、「襯着」しないという表現を用いて、批判がなされている。たとえば、市河寛齋の「菊枕」詩（『寛齋先生遺藁』卷三）の起句「東籬幽昧不勝清（東籬の幽昧 清きに勝へず）」に対しては、「起承は東籬と幽昧、襯着を得ず」（八号、五頁）と記されている。すなわち、まがきを形容する場合は、「秋色」などの語がよりふさわしく、奥深いという意の「幽昧」は、あまりに漠然とし過ぎていると言うのである。

また、「字面」という言葉もしばしば登場する。たとえば、柏木如亭「木母寺」（『如亭山人藁』）の起句「隔水香羅雜踏過（水を隔て 香羅は雜踏として過ぎ）」に対しては、鼠聖が「未だ佳ならず」と指摘し、「雜踏過」の字面は、いかにも十分ならずと

するも、此三字の欠鎧のため、完作ならずとは、少し山人に氣の毒なり」（『作詩』九号、一七頁）と応じている。

実際に、明治期東京の漢詩人たちは、詩学における知識の点で、江戸時代の詩人よりも、自身たちの方が進歩しているという、強烈な自負を持っていた。たとえば、鼠聖は、茶山の「柏谷途中」（『黄葉夕陽村舎詩』卷二）や「江良路上」（『黄葉夕陽村舎詩後編』卷七）などの詩を評して、「文化文政より、天保度の詩人などは、此位の詩を作りても、茶山先生と、人々其詩を伝称せしは、随分詩人の氣楽な時なりし」（『作詩』一四号、一一頁）と評している。また、頼杏坪の「夜雨宿双白堂」詩（『春草堂詩鈔』卷七）に対して「今日我々が作るには、今少し字句の間にも、工夫をせねばならん所なり」（『作詩』一六号、二頁）と述べ、明治期の詩人たちは、江戸時代よりも、さらに質の高い作を作るための努力が必要であると主張している。

彼らの指摘のなかには、今日から見て、厳格にすぎるものや妥当かどうか疑わしいものもあるとは思うが、明治中期の東京漢詩壇を覆つていた感覺を看取することができる。漢詩人たちは、言葉の用い方に対する敏感であり、それに基づいて詩の価値を決めていた。柳湾はこうした価値観のもとで、きわめて優れた詩人と位置づけられたのである。

五 荷風の柳湾評価における独自性

以上のような変遷を経た後に、大正一三年から一四年（一九二一）

四（一九二五）にかけての荷風の柳湾への言及が行わるのである。近世後期以来の潮流を踏まえた場合、荷風の柳湾に対する理解は、どのように見えてくるだろうか。

まず、指摘すべきは、荷風が、『北越詩話』における柳湾の理解に対して反駁を試みている点である。すでに見たように、五峰は柳湾の詩の要諦を「芬芳俳諧」にあると見ていた。しかし、荷風は、『葦齋漫筆』において「柳湾の作中こゝに予の愛誦して措くこと能はざるものは穀堂の評して芬芳俳諧となせしものよりも、寧^{むしろ}淡雅清酒なる目白台園居の諸作なりとす」（『全集』第一五卷・四五九頁）と述べ、柳湾の平明な詩を評価すべきであると論じている。いわば明治中期以来、定まりつつあつた柳湾への認識に、大きな変更をもたらしたのである。

ただ、同時に目を留めなければならないのは、荷風は、人間関係の点では、明治期の東京漢詩壇と密接につながつてゐるという点である。荷風の父永井禾原が、春濤門下の漢詩人であつたことからもそう言えるが、柳湾評価に関して、より重要なのは、「読詩偶評」の執筆者の一人と目される岩渕裳川が荷風の漢詩の師であり、『下谷のはなし』や『葦齋漫筆』を執筆していた時期に、數度面会しているという事実である。すなわち、『断腸亭日乗』大正一二年（一九二三）八月二一日には、「午前三番町二七不動祠後岩渕裳川先生の寓居を訪ひ、春濤詩鈔のことにつきて教を乞ふ」（『全集』第二二卷）と記されている。このほか、大正一四年（一九二五）九月二七日には裳川が荷風宅を来訪、同一五年（一

九二六）三月二九日には書籍返却のため、荷風が蓑川宅を訪れている。この年の四月一九～二一日にかけては、荷風の詩を蓑川が添削し、添削を経た詩を荷風は日記に書き留めている。明示的な証拠は見出しえないので、こうした機会に蓑川から柳湾についての高い評価を耳にした可能性は十分考えられるのである。

詞華集における収録状況から考えた場合、荷風が好んだ詩のいくつかは、近世期において注目されていた点に注意すべきである。具体的に言えば、荷風が『葦齋漫筆』において言及した「雜司谷雜題」（柳湾漁唱二集）、「初冬即事（第二首）」（同）¹⁶の詩は、近世期の詞華集においてすでに取り上げられている。

とくに荷風が、フランシス・ジャム（Francis Jammes）やポール・フォール（Paul Fort）に近い情趣を感じると述べ、高く評価した「雜司谷雜題」の第一首（鬼子母神の縁日において売られる風車について詠つたもの）及び第三首（すきで作つた梟の玩具が店で売られているについて詠つたもの）について、同じものが、すでに『新選十二家絶句』に採録されている。荷風が注目した作品は、江戸時代においてすでに関心の対象となつていたのである。

これらの詩については、「読詩偶評」においても、「能く作りたり、見る様だねー」（虱仙、第二首に対するもの）、「後の詩の趣向が面白し、一寸出来ん」（鼠聖）、「こんな事も云ひ様で詩となるなり」（虱仙、以上、第三首に対するもの、以上、『作詩』一一号、一七頁）などと賞賛されている。蓑川ら明治東京の漢詩人と

荷風とでは、柳湾に対する認識の方向性を異にしていたが、具体的にどの詩を好むかという点では、一致する部分もあつたと言えよう。

しかし、『葦齋漫筆』において言及された詩の中でも、次に掲げる「秋尽（秋尽く）」詩は、今回、調査した範囲では、近世後期以降の詞華集における採録が確認できなかつた。

静裏空驚歲月流

静裏 空しく驚く 岁月の流るゝに

閑亭独坐思悠悠

閑亭 独り坐し 思ひ 悠悠たり

老愁如葉掃難尽

老愁は 葉の如く 掃へども尽きがたし

蔌蔌声中又送秋

蔌蔌 声中 又た 秋を送る

（柳湾漁唱二集）

詩は、老いによって生じる愁いを、はらつても尽きない落葉に喻えている。すなわち、静かなあずまやに一人佇み、はらはらとういう落葉が散る音を聞きながら、時の流れの早さに思い至つたと詠つてゐる。

なお、寓目し得ない関係文献が存在する可能性はあるが、この詩は、荷風によつてはじめて見出された「名作」である可能性が高い。

あるいは、荷風が「秋尽」詩に目を留めたのは、西洋文学の知識と関係しているかもしだれない。落葉を扱つた作品としては、たとえば、「げにわれは うらぶれて こ、かしこ さだめなく」といふ散らふ 落葉かな」という、上田敏の翻訳で知られる（落葉）『海潮音』一九〇五年）、フランス象徴派の詩人ポール・ヴェ

ルレーヌ (Paul Verlaine) の「秋の歌」が有名であるが、荷風は

『あめりか物語』「おち葉」(全集)第四卷において、この「秋の歌」を引用しつつ、「人の身を落葉に比る例は、新しからぬだけ、いつも身にしむ思ひである」と述べている。

また、荷風が¹⁹『柳湾漁唱』を読んだのは、大正一三年の一月一〇日前後であり、ちょうど落葉の季節にあたる。こうした様々な要素が重なって、今日最もよく知られることとなつた柳湾の作は日の目を見るようになつたと考えられる。

おわりに

本稿では、近世後期以降に発表された詩話や評論、詞華集などを通覧し、柳湾詩に対する評価の変遷について見てきた。

在世時から柳湾は、中晚唐の詩を愛し、自身の詩を鍛磨してやまない詩人として知られていたが、岩渕裳川ら明治期の東京で活躍した漢詩人、さらには坂口五峰によつて、柳湾の情趣豊かで洗練された詩が喧伝され、その声価はますます上がつた。その後、荷風が、柳湾の平明な詩を評価し、柳湾の詩人像の理解に新たな展開をもたらした。

ただ、柳湾をめぐる議論の様相は、やや複雑である。たとえば、裳川らによる『読詩偶評』の柳湾への高い評価と、五峰『北越詩話』におけるそれとは、ともに森春濤からの潮流として理解することができる。ただ、両者の間には、力点の置き方に違いがある。『読詩偶評』の批評は、『北越詩話』のそれと比較すると、より詩

の措辞と構成に重きを置いているようと思われる。

また、柳湾詩への見解という点では、多くの異なる部分を持つ裳川と荷風とが、詩の道において師弟の関係にあるなど、人間関係を視野に入れると、事態はより錯綜の感を増す。

最後に、現代の選詩状況について確認する。今日の代表的な詞華集には、永井荷風による評価が色濃く反映され、「秋尽」の詩は必ずといってよいほど収載される一方で、近世後期において評価の高かつた「高山竹枝(第二首)」や、明治の詩人たちが、柳湾の詩中の傑作と称した「読隋記」詩は採録されていない。

柳湾をめぐる評価の変遷は、何を優れた詩と考えるかの基準が、時代によつていかに異なつてゐるかを、如実に示している。

注

- (1) 館柳湾の詩及び伝記については、本文中に掲げるもののほかに、
『館柳湾資料集 附・巻菱湖伝(巻町双書二二)』(巻町、一九七四年)、渡辺秀英『柳湾漁唱註(巻町双書二五)』(巻町、一九七七年)、市川任三『小籠吟藁・館柳湾自筆詩稿』(太平書屋、一九八一年)、鈴木瑞枝『館柳湾・人と詩』(『柳湾漁唱』太平書屋、一九八一年)、徳田武『江戸詩人選集第七卷 野村草園・館柳湾』(岩波書店、一九九〇年)、鷺原知良『館柳湾の晚唐詩受容—皮日休陸龜蒙の攝取例を中心』(『和漢比較文学』二三三号、一九九九年八月)、鈴木瑞枝『日本漢詩人選集第一三卷・館柳湾』(研文出版、一九九九年)、石川忠久『茶をうたう詩—『詠茶詩録』詳解』(研文出版、二〇一一年)などを参照した。なお、『柳湾漁唱註』は、柳湾詩の全注解であり至便だが、いくつかの詩について解釈

を改めた。

(2) 『五山堂詩話』各編の刊行年については、『江戸の詩壇ジャーナ

リズム』「五山堂詩話」の世界（角川書店、二〇〇一年）、二五

頁を参照した。

(3) 本稿で取り上げたもののはかに、「読農書（偶懐）」「雨夜宿小

阪駅」「詠手炉」「山村」（以上、卷三）、「金山雜詠」（補編卷六）

が収録されている。

(4) 『新選士二家絶句』中、「文政十七家絶句」と重複して収録され

ているものは、「寄懷山田元凱」「過旧送別処」「謾題」「讀隋紀」

「上金輪寺後閣（第二首）」「寄致遠」「栗軒偶題（第一～五首）」

（いずれも「柳湾漁唱」所収）である。また、「天保三十六家絶

句」と重複して収録されているものは、「江上春霽」「和致遠見友

人別妓」「夏日雜題（第一首）」「雜司谷雜題（第二首）」（いずれ

も「柳湾漁唱二集」所収）である。このほか、

(5) 「夏日雜題（第二首）」「弄槐珠」（いずれも「柳湾漁唱一集」）

「老狸鼓腹図」（「柳湾漁唱三集」）である。

(6) 五峰が柳湾に注意を払うようになった時期は、明治一七年（一

八八四）に遡る。この年、五峰は、「林園月令」の稿本を入手し、

「林園月令稿本歌」（「五峰遺稿」卷上、一九二五年）を制作して

いる。なお、「北越詩話」は、「新潟新聞」に連載された記事をまとめたものであり、同書刊行以前に、五峰は柳湾について情報發

信を行つていたと考えられる。

(7) この詩には異同があり、「湖山樓詩屏風三・四集」（明治一九年

（8）森春濤「詩魔自詠（第二首）」にも「平生不必患才多／奈此芬芳排惻何（平生 必ずしも才の多きを患へざるも／此の芬芳排惻

を奈何せん）」という詩句があり、同じ意味であると思われる。

(9) 「讀詩偶評」は、「作詩作文之友」八号（明治三三年（一八九

九）三月）～二〇号（同二二月）に連載されている。その一部

については、拙稿「鞭声肅肅」の明治一頼山陽「題不識庵擊機

山図」詩と詩吟・劍舞」（アナホリッシュ国文学）三号、二〇一

三年六月）において論及した。

(10) 注五拙稿において触れているが、虱仙は、自身が服部南郭の詩

についての評を「精美」誌上の「骨董美」において発表したと述べている。この「骨董美」は、裳川の手になるものであり、「虱

仙」が裳川であることが分かる。

(11) 虱聖については、明治東京漢詩壇の中心人物であった森槐南が

若年期に書いた文章と、語彙・内容の両面で酷似していることが注目される。「讀詩偶評」（二〇号、一三頁）において、虱聖は

「五山の詩は腐氣満紙、其佳となすものは、皆油腔滑調にして、

絶て清新と云ふ所なし」と述べているが、森槐南の「詩

問」（「新文詩」二集、明治一八年六月）には、「惜ヒカナ、文

化政ノ諸先輩 競テ律絕ヲ以テ相標榜シ、務メテ模擬剽窃ノ弊

ヲ矯セント欲シテ、油腔滑調ノ害ヲ貽スヲ知ラズ」（傍線部の語彙が一致）と記されている。なお、裳川一人が対話形式で執筆した可能性もある。

(12) この評は、「南浦重過春草時（南浦 重ねて過ぐ 春草の時）

（過旧送別処）結句）や「月満桃花水漲時（月満ち 桃花 水

漲るの時）（和致遠見友人別妓）結句）などの表現について評したものである。

(13) たとえば、柳湾の「讀隋記」について、春濤の「詠史二首（隋

二世）」（「春濤詩鈔」卷四）を引き合いに出し、「共に好議論とな

すべし」（作詩）一号、一五頁）と述べている。また、柳湾の

「和致遠見友人別妓」詩を論じる際、「春詩百題存二十五（第六

首・春水）」（「春濤詩鈔」卷四）を挙げ、「情韻相似て双璧となす

べきもの」と評している(同、一六頁)。

(14) ただし、虱仙は、「そんないふ程、五山の詩は悪くはない」(『作詩』一〇号、一一页)、「五山もそんない棄てたものにもあらず、未だ好き詩もあるべし」(同、一二頁)とやや批判的調子を弱めている。

(15) 「断腸亭日乗」中、最も早い柳湾関係記事は、大正二三年二月一日の「電車にて牛込横寺町二十三番地長源寺に至り、館柳湾の墓を展す。寺の媼の談に柳湾一家の墓、及森東郭、岡部平仲の墓は先年東京市役所より保存の命ありしと。今は皆無縁なり」

(『全集』第二一巻)というものである。この時期は、「下谷のはなし」執筆時期にあたっており、近世後期の漢詩人について調査するなかで、荷風は柳湾を知ったと考えられる。

(16) 荷風は「是より先、予は贊を岩渕裳川に執り、漢詩の作法を学ぶ」(『断腸亭日乗』中の「自伝」『全集』一五巻、四八六頁)と述べている。荷風の漢詩歴や裳川との関係については、池澤一郎『荷風俳句集』解説(岩波書店、一〇二三年)に詳しい。

(17) 「雜司谷雜題」第二首は以下のとおり。「鬼母堂前満路塵／幾群香火晚帰人／風車斜挿籃輿上／紅緑渾渾転彩輪(鬼母堂前路に満ちる塵／幾群の香火 晚帰の人／風車 斜めに挿す 篓輿の上／紅緑渾渾転彩輪 紅緑 渾渾として 彩輪を転す)」。四つ手籠の上に挿された風車の赤と緑がくるくると回つて色鮮やかな様を言う。第三首は以下のとおり。「孟冬之月雉為蜃／幾歲疑懷今始休／一笑西邨寺前路／芒花入店化鵠鵠(孟冬の月 雉 はいり蜃と為る／幾歲か疑懷すれど 今 始めて休む／一笑す 西邨寺前の路／芒花 店に入りて 鵠鵠に化すを)」。起句は、「礼記」「月令」の「雉入大水為蜃(雉 大水に入りて蜃と為る)」を踏まえる。すなわち、「礼記」の、キジが大ハマグリとなつたとは分からぬい説明だと思つていたが、今日、鬼子母神の縁日ではじめて理解

できた。ここでは、ススキがミミズクに化けているのだから(す

すきで作った梶の玩具を指す)と詠う。

(18) 「雜司谷雜題」は全六首の連作詩であるが、どの詩篇を取り上げられるかは、詞華集によつて異なる。『天保三十六家絶句』に第一、二首がまた『北越詩話』に掲載された三浦桐陰による選詩録中に第三首が採られている。

(19) 「断腸亭日乗」には、大正二一年二月一日の条に「枕頭に柳湾漁唱あるを見、把りて第一集を読み、第二集の半ばに及ぶ」(『全集』第二一巻)、同一日の条に「枕上柳湾漁唱を読むで眠る」(同)とある。

(20) たとえば、「新編漢文大系四八」(明治書院、一九七二)「江戸詩人選集」第七卷(野村草園、館柳湾)(岩波書店、一九九〇年)、「日本漢詩人選集」第二三巻(館柳湾)(研文出版、一九九九年)には、「高山竹枝(第二首)」、「読隋記」の二詩は収録されている。

底本について
諸資料については、以下を使用した。

『采風集』、『五山堂詩話』、『文政十七家絶句』、『天保三十六家絶句』、『六名家詩鈔』、『皇朝分類名家絶句』、『今四家絶句』:『詞華集日本漢詩』(汲古書院、一九八三・八四年)を使用。
『柳湾漁唱』、『寛齋先生遺藁』、『黄葉夕陽村舍詩後編』、『同後編』、『春濤詩鈔』:『詩集日本漢詩』(汲古書院、一九八五・一九九〇年)を使用。
『北越古今詩選』、『新選十二家絶句』、『今古百家詩文』、『才子必誦』、『嵐山片玉』、『騷士必誦』今古詩文:国立国会図書館蔵本を使用。
〈複写及び国立国会図書館デジタル・コレクションにより確認〉。
『鴎盟集』:新潟大学図書館(佐野文庫)蔵本を使用(複写)。

〔篠中集〕：早稲田大学図書館蔵本を使用（早稲田古典籍データベースより確認）。

〔如亭山人藁〕：『如亭山人集』（太平書屋、一九七九年）中の複製を使用。

〔隨園詩話〕：『中国古典文学理論批評專著選輯〔第二版〕』（人民文学出版社、一九八二年）を使用。

〔作詩作文之友〕：東京大学近代日本法制史料センター（明治新聞雑誌文庫）本、及び架蔵本を使用。

なお、荷風の文献は、すべて『荷風全集』（岩波書店、一九九三年）に拠つた。

付記 ご教示を賜りました柏木隆雄氏、また、貴重な資料の閲覧・複写をお許しいただいた国立国会図書館、新潟大学図書館、東京大学明治文庫に深謝申し上げます。

なお、本稿脱稿後、大沼枕山に「今茲甲辰四月、柳湾館翁没矣。方外友密乗上人、命画師某摸写翁真、請花亭岡本君、題詩于上頭、会余及諸友而展拜之。即次花亭君韻（今茲甲辰四月、柳湾館翁没せり。方外の友密乗上人、画師某に命じて翁の真を摸写せしめ、花亭岡本君に請ひて、詩を上頭に題せしめ、余と諸友とを会して之を展拜せしむ。即ち花亭君の韻に次す）詩（『枕山詩鈔』卷中）や「春初絶句、倣柳湾老人（春初絶句、柳湾老人に倣ふ）」詩（『枕山詩鈔二編』卷上）などの柳湾に言及した詩があり、荷風の柳湾の詩に対する関心を理解するためには、こうした枕山の作を検討する必要があるとのご指摘をいたいた。これについては、当然考えるべき問題であったが、本稿では触れ得ていよい。後考を期したい。池澤氏のご教示に深謝申し上げます。

本論文は、国文学研究資料館「歴史的典籍に関する大型プロジェクト」共同研究（公募）「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」の成果の一部である。

（どうやま・りんたろう 本学大学院准教授）